

「加賀越中能登」書籍総覧

—地域コレクション書誌解題

全二・別巻

加賀・能登・越中「らしさの継承・創造・発信」を促す。
紙メディアをモビライズする索引ツールを新規に作成。

標準的選書リストによる画一化と、
郷土資料・レファレンスへの軽視という風潮の中、
地元図書館こそが、情報の新しい地産地消の場として
機能しうることを示す。

編集—金沢文圃閣編集部
解題—由谷 裕哉 (小松短期大学)
推薦—小林 昌樹
造本—A5 / B5判 糸上製函／並製 (別巻のみ) 総 434 頁
価格—揃価 35,000 円
刊記—2018 年 11 月 ISBN978-4-909680-06-8

【第一巻】150 頁
森田柿園「加越能書籍一覧」(『石川県立図書館月報』、1929～32年)
太田敬太郎「加越能書籍解題」(同、1932～41年)

【第二巻】236 頁
石川県図書館協会『加越能古俳書解題』(同、1930年)
石川県図書館協会『加越能書籍集覧』(同、1931年)
* 附録資料「色杉原」・「正誤表」(『加越能古俳書解題』別刷)

【別巻】48 頁
ISBN978-4-909680-07-5 (別巻のみ分売可 1,000 円)
* 解題・総目次・索引・推薦文

関連図書案内

* 文庫文献類従9*

日本書誌の書誌—社会科学編 (主題編3)

編集—天野 敬太郎
協力—深井 人詩
造本—全 1 巻・A5判・糸上製函・総 324 頁
揃価—22,000 円

* 文庫文献類従55*

明治期書店文書—信州・高美書店の近代 (出版流通メディア資料集成 (五))

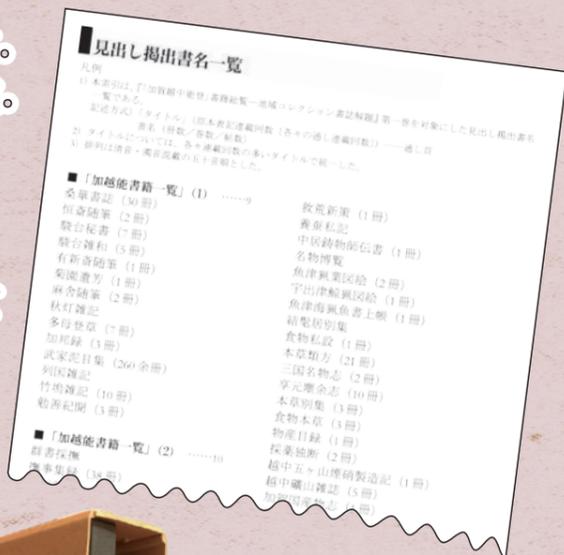
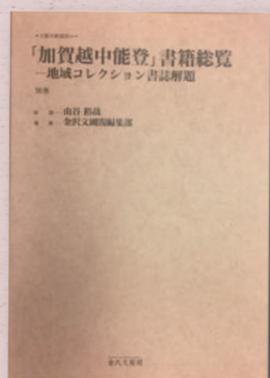
編・解題—和田 敦彦・柿本 真代・河内 聡子・新藤 雄介
田中 祐介・中野 綾子・西尾 泰貴・森山 祐子
造本—全 6 巻・A5判・上製函・総 2,030 頁
揃価—132,000 円

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣

〒920-0867 金沢市長土塚2-16-30
Tel 076-261-8884 Fax 233-3111

□書店様へ…ありがとうございます
直接小間までお申し込みください

図版は主に本書より
価格は税別 049/11/4000



書誌・出版史・書物メディア史のシリーズ * 文庫文献類従64*

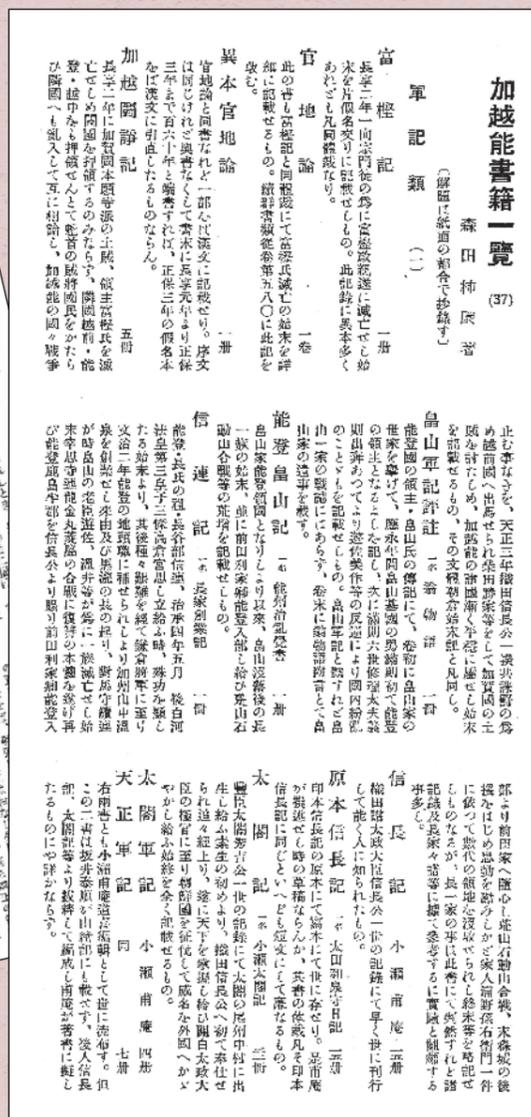
「加賀越中能登」書籍総覧

—地域コレクション書誌解題

[編集復刻版]
全二・別巻

編集—金沢文圃閣編集部
解題—由谷 裕哉

かつて「加賀は天下の書府」と言われた。
近世江戸の写本文化はどのように大正・昭和戦前期、
日本で最先端サービスをしていた近代図書館に受継がれたのか？
地域の歴史・郷土資料に関する情報を提供、後世に継承。



1929年、異能のカリスマ館長・中田邦造の

「加賀藩及び石川県の地、人、事に関係ある図書を徹底的に調べ上げん」という理念のもと、
京都帝国大学附属図書館長・新村出、帝国図書館長・松本喜一、前田公爵家らを顧問に迎え
「加能越図書調査」は開始された。

目的は、近世から明治末期までの書籍を通じ、加賀藩及び石川県の地域文化史を明らかにすることにあった。

この目的達成のために資料解題は月報雑誌に137回継続され (第一巻)、リンク情報としての書誌は編まれた (第二巻)。

それらを集成し、索引を備えたのが本書である。

郷土資料書誌は、情報の地産地消の魁だ

小林 昌樹

中央（東京）からの情報を受信する「読書装置」として近代日本の出版流通網が成立した。中央で生産された本（月刊雑誌など）が、大取次（おおとりつぎ）、鉄道、取次と下って日本全国津々浦々の街の書店まで配給されてきていたのだ。しかし大正時代になると、地方に自分たちの郷土を見直し、そこから自分たちのための独自の、新しい情報を得ようとする動きが出てくる。方言や郷土史を採録する「郷土研究」がそれだ。この動きは後に民俗学などに発展していく。

図書館もまた近代の読書装置として、当初は中央で生産された情報パッケージをいかに地方の人々に見せる／読ませるか、という観点から各地方で始められ、東京の新刊書を集めるのに腐心していた。しかしこちらも大正時代に入ると、郷土研究の盛り上がりと呼応して、郷土資料の収集が一部の先進的図書館で始まる。その一つが今回編集復刻にかかる石川県立図書館であった。

いまでこそ図書館界で郷土資料サービスというと、古いサービスのように思われてしまうが、大正期には、明治の欧化主義、中央中心主義に対抗するニューウェーブだったのは、『公共図書館の冒険』（みすず書房、2018年4月）で指摘したところだ。

地元で発生する情報が郷土資料としてまとめられ、それらをリストアップした書誌が作成され、古書店などから購入され、さらに重要なものは印刷・頒布（＝出版）されてゆく……。このような郷土研究の情報サイクルは、もちろん在地の郷土史家や地元印刷会社（地方では出版社が成り立ちづらく、印刷所や新聞社が代替機能を果たした）の担うところであったが、大正期から昭和30年代にかけて公共図書館も関与していた。というか、むしろ図書館の郷土資料担当者こそが郷土史研究者だったのだ。当時、日本で最先端のサービスをしていた石川県立図書館もまた郷土資料に力を入れ、大正13年にすでに石川県立図書館編『県人文

庫目録：東宮殿下御成婚記念；郷土志料図書目録』（宇都宮書店、1924年）という主題書誌を出版している。今回復刻に付された郷土資料書誌も、この流れの延長上に図書館月報に連載されたものだといえよう。

石川県立図書館の場合そういった土台の上に、異能のキャリア館長・中田邦造の着任で、さらに独自の展開が図られ、なんと郷土資料の出版にまで乗り出す。情報サイクルの最後の1ステップたる出版は、多大なコストがかかるため、当時、図書館という公的機関が関与することでどんなにか地方振興になったことだろう。出版不況が叫ばれる現在でこそ評価されるべき一コマだ。1970年代に東村山市立図書館（東京）の呼びかけによって地方出版・小出版の価値が見直され、「地方小」取次が成立し、また1980年代に浦安市立図書館によって地方小出版社の振興が提唱されたけれども、これらの試みの嚆矢が、すでに昭和初年の石川県立図書館にあったのだ。昭和40年代に郷土資料は後回しにされてしまったが、1990年代に「地域資料」と枠組みが再設定されてからは、むしろ公共図書館にこそふさわしい独自の価値を発揮してきている。

国会図書館が中央の出版物を全てデジタル化しネット公開しようとも、地方出版、地元新聞、折込みチラシ、ミニコミ誌などを主体とする地域資料をコアに据える限り、ネットカフェ以上の存在意義があるのだ地元図書館には。

あたかもよし、ネット時代の今なればこそ、地元の文化財や名所情報をネット百科「ウィキペディア」に書き込んで、地域振興につなげる「ウィキペディアタウン」運動が注目されているが、これを一番やりやすい場所は、実は地元の図書館なのである。地元のことが書かれた情報パッケージは、郷土資料そのものと言ってもよい。紙メディア時代のそれを一番持っているのはどこか。そしてそれへのリンク情報（紙メディア時代は「書誌」と言った）を所蔵しているのはどこか。

そういう意味で、地域図書館こそが、情報の地産地消の場として機能しうのだ。その予言者が中田邦造であり、石川県立図書館だったのである。金沢文圃閣による復刻の特色は、紙メディアをモバイル化する索引を新規につけることである。これにより、今これから必要な情報として今回復刻の書誌は活かされることになるだろう。

（こばやし まさき／国会図書館司書）

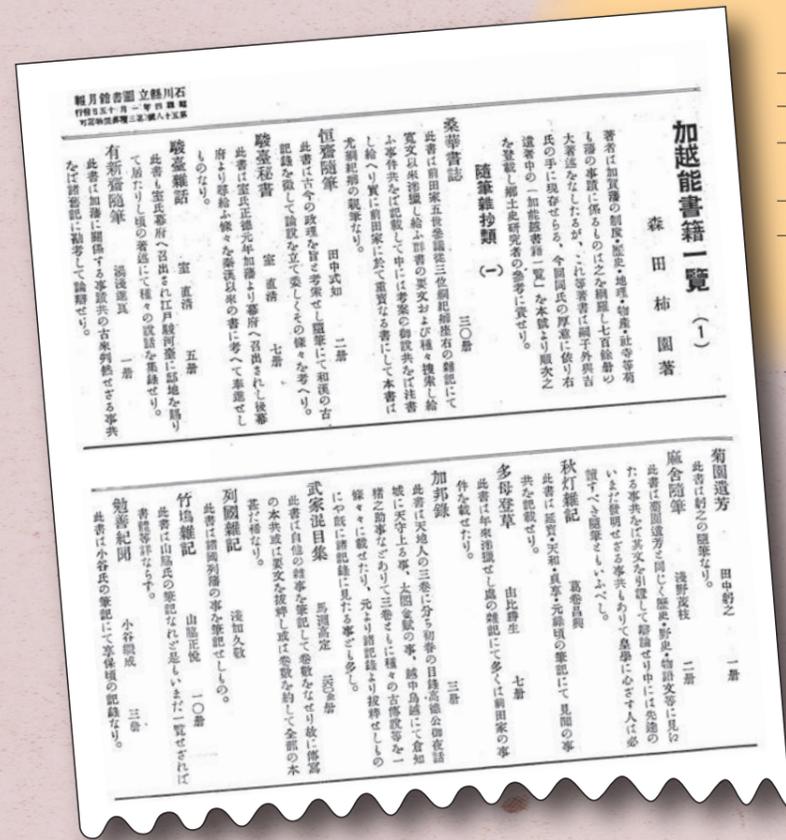


※1937年旧石川県中央図書館職員集合写真（前列左から3番目が中田邦造）『石川県中央図書館月報』（第154号、1937年1月）より

本書の意義

近世から近代に及ぶ資料蒐集・書誌編纂の遺産を現代に

- ①幕末・明治期に活動した前田家書籍旧記取調・森田柿園に至る藩儒森田家が、代々筆写し蓄積した写本類
- ②戦前、地域郷土資料を核としたコレクションづくりが各地の先進的図書館で進む中、筆頭に立つ石川県立図書館は「加能越図書館調査」という悉皆調査→書誌編纂→さらには郷土資料の出版にまで。



『加賀能登越中書籍総覧』関係略年表

1879年	石川県勸業博物館内に図書室設置、前田家蔵書三万余冊を中心に公開
1912年	石川県立図書館、開館
1927年	西田幾多郎のもとで哲学を学んだ中田邦造が館長として就任
1929年	秘庫とされた森田柿園の旧蔵書を県図書館が購入。加賀能登越中書籍調査を開始
1931年	県図書館協会、郷土関係図書出版を始める
1933年	中田邦造「地方公共図書館の古書展と書誌学」で、郷土資料の発掘・整備を提言。その後、「町村誌編纂講習会並に全国町村誌展覧会要綱―県下全町村に今年内に町村誌稿を作れ」で地域・郷土の歴史化を促す
1936年	「加賀能登を中心とする日本海文化展覧会」を県図書館、県商品館で開催

森田 柿園(平次) 1823(文政6)～1908(明治41)年 郷土史家、前田家書籍旧記取調主任。下級陪臣の子として生まれる。

- 1869年 前田家「家録編集職」の一員となる
- 1872年 蔵書調査終了し前田家蔵書を自宅に借用
- 1885年 『加能越書籍一覽〔自筆本〕』全二十巻の執筆開始。前田家より加能越三州事蹟の編纂を依頼
- 1891年 「金沢の百科事典」と呼称される『金沢古蹟志』執筆。

「その編著せし書籍はもちろん、群書を読破して抄出した資料は、古文書の模写に至るまで数千冊という山の如き図書を手を煩はさずして自ら整然と写し上げている」。

